



真剣勝負、的を射る目が鋭い。関根プロはサウスポーター（競技写真はいずれも本人提供）

大学院を修了し、大手企業に就職。システムエンジニアとして働いていた1年目の昨年3月、ダーツ選手のプロライセンスを取得した。「SOFT DARTS PROFESSIONAL TOUR JAPAN」（一般社団法人J. D. U.）の一員として、全国で開催される年間18試合のプロ出場大会にエントリーしている。

女子の出場選手は1大会に約70～120人。勝ち抜いていくことはたやすくはない。

ダーツ競技に、設定した数字を

相手よりも先にゼロ（0）にする「ゼロワン」というゲームがある。例えば、「76」が残ったとき、ぴったり0にするために1投目は「16」に投げることで、2投目は「60（20の3倍）」を残すアレンジをして、0を目指す。

「パパッと次に投げる手が思いつく」というのだから、セオリーを体に染みつけるだけでなく、頭の回転の速さも重要のようだ。

大学院時代に数学の教員免許を取得したことも役立っているのだろう。狙ったスペースへ確実に投げる

コントロールの良さも兼ね備えている。

的となる円形ボードは投げる位置から2・44センチ先、ボードの直径は約40センチ。中心円の直径は1・6センチ、すぐ近くの外円（同）でも約4・4センチと小さい。恥ずかしながら、筆者は以前にダーツに挑戦したとき、矢がボードにさえ届かなかった。

関根プロの父が、連れて行ってくれ、と娘との対戦を望んだことがあったという。結果は完敗。「何試合

本職はシステムエンジニア プロダーツ選手 関根麻耶さんに迫る

システムエンジニアとして働きながら、プロのダーツ選手として活躍する女性がいる。中央大学理工学部経営システム工学科卒、中央大学大学院理工学研究科経営システム工学専攻を修了した関根麻耶さんだ。身長180センチという長身を生かし、モデルとしても活動中。

学生記者 齋藤優衣(総合政策学部1年)



「やっても私に勝てなくて」。筋肉もないやつに…とひどく悔しがったそう。

父は小学校の体育教師。スポーツ万能で、「私は小さいころからよく運動させられた」というほど熱心な指導を受けてきた。「筋肉がなくても、体が細くても、ダーツは勝てます」と関根プロ。奥が深い競技である。



初心者の友人に誘われて

ダーツを始めたのは、大学時代

の友人に勧められたことがきっかけだという。その友人も初心者だったが、会うたびにダーツバーで一緒に練習するようになった。

それまでは数回、遊びでプレーしたことがあるだけ。さほど興味はなく、自分には縁がないものとさえ考えていた。

練習を続けていくうちに、めきめきと力をつけ、プロレベルにまで上達した。

「プロになりたいくて練習してきたわけではないんです。練習していたら(プロに)なれちゃった!という

感じ」

練習したら(プロに)なれちゃった、と謙遜するが、幼いころからの多岐にわたる活動が礎になっているものと考えられる。

中学時代は硬式テニス部(部長)で活躍していたほかに、学内選抜で選ばれて陸上競技<短距離、走り高跳び、走り幅跳び>=区大会入賞>と水泳を経験した。

高校ではフォークソング部(副部長)に所属。ベースやギターを奏で、ドラムをたたいた。ベースは音楽リズムの中心だ。

「ベースをやっていたのが良かったのかも。(試合で)私はリズムで投げています」

多くの活動をこなすうちに、オンとオフの切り替えがうまくなり、オンの時の集中力の高め方が身についていったという。

関根プロの強さは、これまでの豊富な経験が複合的に積み重なって作られたものといえそうだ。



もっと広めて いきたい

プロになると、モデル活動もする女子プレーヤーということでちやほやされることも多く、アイドル的存在であった。練習で訪れたダーツバーでは、在店が分かるとあつという間にファンが集まってくる。

「しかしスポンサーが増えるにつれ、これまで以上に試合で勝ちた

い、優勝したい」という思いが強くなったという。勝負事はあまり好きではないというが、プロに求められるのは勝利。負けず嫌いな性格も相まって、闘争心が芽生えてくるそうだ。「自分より強い人にも勝てるということがダーツの魅力」と話す。

試合を通じてほかのプロ選手とも仲良くなる。もちろん試合ではライバルであるが、勝っても負けても、試合が終わると話しかけにいくという。

ダーツを好む年齢層は小学生から年配の方まで幅広い。年齢、性別関係なく、ともに楽しんでプレーすることができるのも、ダーツの良さだ。

「ダーツの魅力を広めていきたい」と話す関根プロ。彼女の活躍に、目が離せない。



後ろから見た試合風景

□ 複数からスポンサード

プロとなれば収入が気になるところ。関根プロはダーツバーを含めて、複数社から支援を受けている。店が主催する競技イベントに出演、ファンとの交流イベントに参加。競技の普及・広報にも一役買っている。試合出場はプロ公式戦のほか、各所で開かれるトーナメント形式の小規模試合に参加し、実力を伸ばしている。

□ 公式戦後のお楽しみ

プロダーツの大会は、年に18回、土・日に全国各地で開かれる。月に1~2回ほどある大会に、関根プロは本職の都合に合わせて参加している。遠征先では、その土地のおいしいものを食べたり、観光したり。「試合が終われば旅行しているような感覚でリフレッシュしながら」。全国で開かれる大会に参加しているそうだ。



フィニッシュも見事

取材後記

初取材は緊張の連続

今回の取材は、私にとって学生記者として初めての活動であった。取材前はとにかく緊張した。多摩キャンパスから後樂園キャンパスへの電車移動に失敗し、反対方向の電車に乗ってしまったことも苦い思い出である。

しかしながら、関根さんの優しい人柄と柔らかい場の雰囲気次第に緊張がほぐれた。正直、聞き手として未熟で自分の言いたいことをうまく伝えることができずに悔しい思いをしたが、それ以上にお話を伺って、ダーツをやってみたいと好奇心が生まれた。今回の原稿から、読者の方々にも私が感じたダーツの魅力が伝わっていることを切に願う。関根さん、貴重なお話をありがとうございました。(齋藤)

